

離散数学

— 1. 集合と写像 — — 1.1 集合 —

2007.10.3

定理 17. 任意の集合 X, Y, Z に対し、以下の等式が成立する。

1. $X \cup Y = Y \cup X,$

$X \cap Y = Y \cap X.$ (交換律)

2. $(X \cup Y) \cup Z = X \cup (Y \cup Z),$

$(X \cap Y) \cap Z = X \cap (Y \cap Z).$ (結合律)

3. $(X \cup Y) \cap Z = (X \cap Z) \cup (Y \cap Z),$

$(X \cap Y) \cup Z = (X \cup Z) \cap (Y \cup Z).$ (分配律)

4. $X \cup X = X,$

$X \cap X = X.$ (ベキ等律)

5. $(X \cup Y) \cap X = X,$

$(X \cap Y) \cup X = X.$ (吸収律)

1. $(X \cup Y) \cap Z = (X \cap Z) \cup (Y \cap Z)$ (分配律)

(証明) $A :=$ 左辺, $B :=$ 右辺 とする.

まず, $A \subseteq B$ を示す:

任意の $x \in A$ に対し, $x \in X \cup Y$ かつ $x \in Z$.

このとき, $x \in X$ または $x \in Y$ である.

そこで, i) $x \in X$ かつ $x \in Z$ ならば $x \in X \cap Z$ より, $x \in B$.

または, ii) $x \in Y$ かつ $x \in Z$ ならば $x \in Y \cap Z$ より, $x \in B$.

したがって, 常に $x \in B$. ゆえに, $A \subseteq B$.

次に, $A \supseteq B$ を示す:

任意の $x \in B$ に対し, $x \in X \cap Z$ または $x \in Y \cap Z$.

そこで, i) $x \in X \cap Z$ ならば $x \in X \cup Y$ かつ $x \in Z$ より, $x \in A$.

または, ii) $x \in Y \cap Z$ ならば $x \in X \cup Y$ かつ $x \in Z$ より, $x \in A$.

したがって, 常に $x \in A$ が成り立つ. ゆえに, $A \supseteq B$.

以上より, $A = B$ が成り立つ. ■

2. $(X \cap Y) \cup Z = (X \cup Z) \cap (Y \cup Z)$ (分配律)

(証明) $A :=$ 左辺, $B :=$ 右辺 とする.

まず, $A \subseteq B$ を示す:

任意の $x \in A$ に対し, $x \in X \cap Y$ または $x \in Z$.

そこで, i) $x \in X \cap Y$ ならば $x \in X \cup Z$ かつ $x \in Y \cup Z$ より, $x \in B$.

または, ii) $x \in Z$ ならば $x \in X \cup Z$ かつ $x \in Y \cup Z$ より, $x \in B$.

したがって, 常に $x \in B$. ゆえに, $A \subseteq B$.

次に, $A \supseteq B$ を示す:

任意の $x \in B$ に対し, $x \in X \cup Z$ かつ $x \in Y \cup Z$.

そこで, i) $x \in Z$ ならば, 明らかに $x \in A$.

または, ii) $x \notin Z$ ならば $x \in X$ かつ $x \in Y$ より, $x \in X \cap Y$.

ゆえに, $x \in A$.

したがって, 常に $x \in A$. ゆえに, $A \supseteq B$.

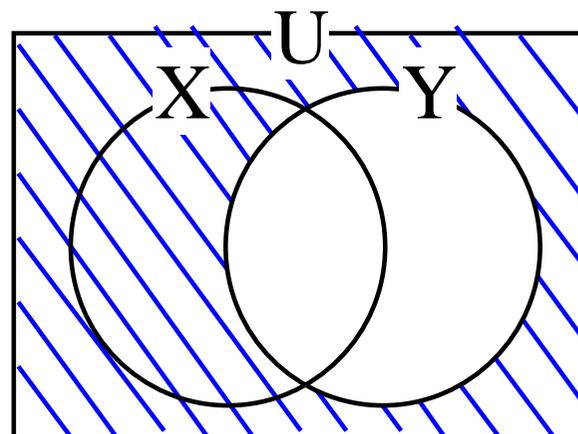
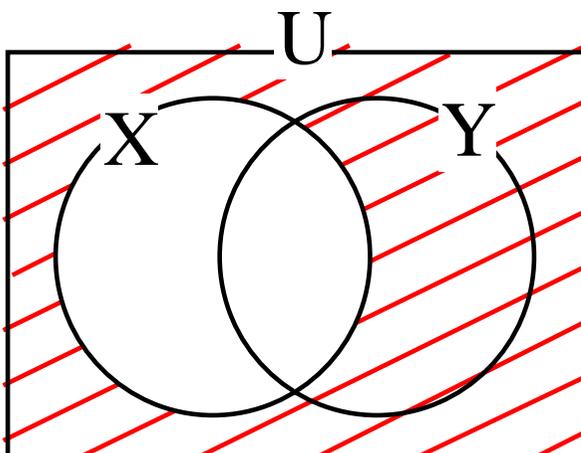
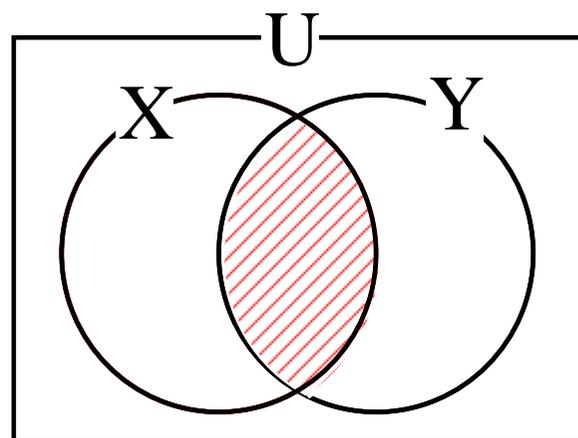
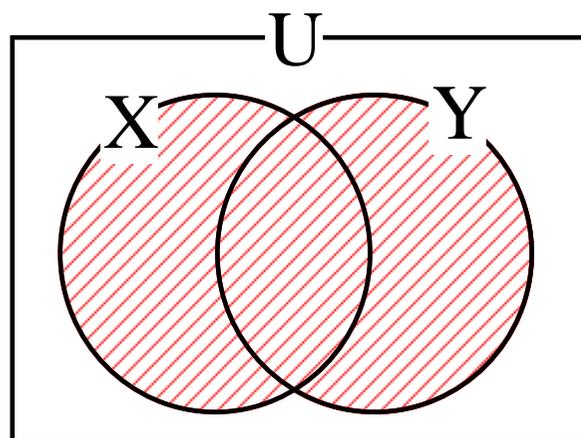
以上より, $A = B$ が成り立つ. ■

定理 18. (ド・モルガンの法則)

和集合, 共通集合, 補集合の間には, 以下のような関係がある.

1. $(X \cup Y)^c = X^c \cap Y^c$.

2. $(X \cap Y)^c = X^c \cup Y^c$.



2. $(X \cap Y)^c = X^c \cup Y^c$.

(証明)

\subseteq) 任意の $x \in (X \cap Y)^c$ に対し, $x \notin X \cap Y$ であるから,
 $x \notin X$ または $x \notin Y$ である.

すなわち, $x \in X^c$ または $x \in Y^c$ であるから $x \in X^c \cup Y^c$.

ゆえに, $(X \cap Y)^c \subseteq X^c \cup Y^c$ が成り立つ.

\supseteq) 任意の $x \in X^c \cup Y^c$ に対し, $x \in X^c$ または $x \in Y^c$ である.

$x \in X^c$ ならば $x \notin X$ である. すなわち, $x \notin X \cap Y$.

同様に, $x \in Y^c$ ならば $x \notin Y$ である. すなわち, $x \notin X \cap Y$.

したがって, $x \in (X \cap Y)^c$.

ゆえに, $(X \cap Y)^c \supseteq X^c \cup Y^c$ が成り立つ.

以上より, $(X \cap Y)^c = X^c \cup Y^c$. ■

例 19. (ド・モルガンの法則)

全体集合を $U = \{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8\}$ とする.

そして, $X = \{3, 4, 5\}$, $Y = \{1, 2, 3, 4, 6\} \subseteq U$ とする.

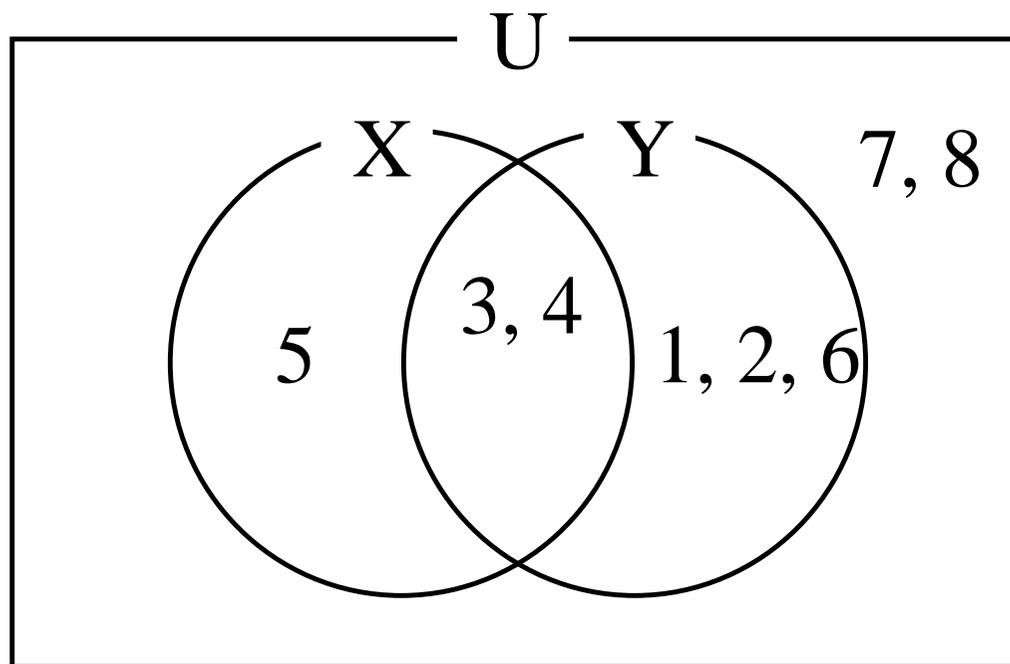
このとき, $X \cup Y = \{1, 2, 3, 4, 5, 6\}$, $X \cap Y = \{3, 4\}$,

$X^c = \{1, 2, 6, 7, 8\}$, $Y^c = \{5, 7, 8\}$.

これより、

$$(X \cup Y)^c = \{7, 8\} = X^c \cap Y^c,$$

$$(X \cap Y)^c = \{1, 2, 5, 6, 7, 8\} = X^c \cup Y^c.$$



例 20. 任意の集合 X, Y, Z に対し、以下が成り立つことを示せ。

1. $(X \cup Y) - Z = (X - Z) \cup (Y - Z)$

2. $(X - Y) - Z = X - (Y \cup Z)$

3. $X - (Y - Z) = (X - Y) \cup (Y \cap Z)$

1. $(X \cup Y) - Z = (X - Z) \cup (Y - Z)$

(証明) $A :=$ 左辺, $B :=$ 右辺 とする. 差集合の定義より,

$A = (X \cup Y) \cap Z^c$, $X - Z = X \cap Z^c$, $Y - Z = Y \cap Z^c$ に注意する.

\subseteq) 任意の $x \in A$ に対し, $x \in X \cup Y$ かつ $x \in Z^c$.

$x \in X$ または $x \in Y$ である.

i) $x \in X$ かつ $x \in Z^c$ ならば, $x \in X \cap Z^c = X - Z$ より, $x \in B$.

ii) $x \in Y$ かつ $x \in Z^c$ ならば, $x \in Y \cap Z^c = Y - Z$ より, $x \in B$.

ゆえに, 常に, $x \in B$ であるから, $A \subseteq B$.

\supseteq) $A = (X \cup Y) \cap Z^c$ であるから,

任意の $x \in B$ に対し, $x \in X - Z$ または $x \in Y - Z$.

i) $x \in X - Z = X \cap Z^c$ ならば, $x \in X$ かつ $x \in Z^c$ より, $x \in A$.

ii) $x \in Y - Z = Y \cap Z^c$ ならば, $x \in Y$ かつ $x \in Z^c$ より, $x \in A$.

ゆえに, 常に, $x \in A$ であるから, $A \supseteq B$.

以上より, $A = B$ が成り立つ. ■

$$(X \cup Y) - Z = (X - Z) \cup (Y - Z)$$

(別証明)

$$\begin{aligned}(X \cup Y) - Z &= (X \cup Y) \cap Z^c && \text{(差集合の定義より)} \\ &= (X \cap Z^c) \cup (Y \cap Z^c) && \text{(分配律より)} \\ &= (X - Z) \cup (Y - Z) && \text{(差集合の定義より).}\end{aligned}$$

$$2. \quad \underline{(X - Y) - Z = X - (Y \cup Z)}$$

(証明)

$$\begin{aligned}(X - Y) - Z &= (X \cap Y^c) \cap Z^c && \text{(差集合の定義より)} \\ &= X \cap (Y^c \cap Z^c) && \text{(結合律より)} \\ &= X \cap (Y \cup Z)^c && \text{(ド・モルガンの法則より)} \\ &= X - (Y \cup Z). && \text{(差集合の定義より)}\end{aligned}$$

$$3. \quad \underline{X - (Y - Z) = (X - Y) \cup (Y \cap Z)}$$

(証明)

$$\begin{aligned}X - (Y - Z) &= X \cap (Y \cap Z^c)^c && \text{(差集合の定義より)} \\ &= X \cap (Y^c \cup Z) && \text{(ド・モルガンの法則より)} \\ &= (X \cap Y^c) \cup (X \cap Z) && \text{(分配律より)} \\ &= (X - Y) \cup (X \cap Z). && \text{(差集合の定義より)}\end{aligned}$$

定義 21. 集合 X_1, \dots, X_n に対し、以下を定義する。

1. $(X_1, \dots, X_n$ の 和集合)

$$\bigcup_{i=1}^n X_i := \{x \mid \text{ある } i \in \{1, \dots, n\} \text{ に対し、 } x \in X_i\}.$$

2. $(X_1, \dots, X_n$ の 積集合 , 共通集合)

$$\bigcap_{i=1}^n X_i := \{x \mid \text{すべての } i \in \{1, \dots, n\} \text{ に対し、 } x \in X_i\}.$$

(例) $X_1 = \{1, 2\}$, $X_2 = \{2, 3\}$ とする。このとき,

$$\bigcup_{i=1}^2 X_i = \{1, 2, 3\},$$

$$\bigcap_{i=1}^2 X_i = \{2\}.$$

定理 22. 任意の自然数 n と、任意の n 個の集合 X_1, \dots, X_n に対し、以下の等式が成り立つ。

1.

$$\bigcup_{i=1}^n X_i = X_1 \cup \dots \cup X_n$$

2.

$$\bigcap_{i=1}^n X_i = X_1 \cap \dots \cap X_n$$

2. $\bigcap_{i=1}^n X_i = X_1 \cap \cdots \cap X_n$

(証明)

集合の数 n に関する数学的帰納法で示す。

$n = 1$ のとき、 $X_1 = X_1$ 。

$n = k$ のとき、 $\bigcap_{i=1}^k X_i = X_1 \cap \cdots \cap X_k$ が成り立つと仮定する。

$n = k + 1$ のとき、 $\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i = X_1 \cap \cdots \cap X_{k+1}$ が成り立つことを示そう。

そのために、まず、 $\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i = (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1}$ が成り立つことを示す。

\subseteq) $x \in \bigcap_{i=1}^{k+1} X_i$ とする。

集合 $\bigcap_{i=1}^n X_i$ の定義より、すべての $i \in \{1, \dots, k + 1\}$ に対し、 $x \in X_i$ 。

したがって、 $x \in \bigcap_{i=1}^k X_i$ かつ $x \in X_{k+1}$ である。

すなわち、 $x \in \bigcap_{i=1}^k X_i \cap X_{k+1}$ 。

ゆえに、 $\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i \subseteq (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1}$ 。

\supseteq) $x \in (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1}$ とする。

$x \in \bigcap_{i=1}^k X_i$ より、すべての $i \in \{1, \dots, k\}$ に対し、 $x \in X_i$ であり、さらに、 $x \in X_{k+1}$ が成り立つ。

したがって、すべての $i \in \{1, \dots, k+1\}$ に対し、 $x \in X_i$ より、 $x \in \bigcap_{i=1}^{k+1} X_i$ である。

ゆえに、 $\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i \supseteq (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1}$ 。

以上より、 $\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i = (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1}$ が成り立つ。

ゆえに、 $n = k$ の仮定より、

$$\bigcap_{i=1}^{k+1} X_i = (\bigcap_{i=1}^k X_i) \cap X_{k+1} = X_1 \cap \dots \cap X_k \cap X_{k+1}$$

が成り立つ。

以上のことから、数学的帰納法により、任意の自然数 n に対して

$$\bigcap_{i=1}^n X_i = X_1 \cap \dots \cap X_n$$

は成り立つ。■

定理 23. (拡張されたド・モルガンの法則)

任意の集合 X_1, \dots, X_n に対し, 以下が成り立つ.

$$1. \left(\bigcup_{i=1}^n X_i \right)^c = \bigcap_{i=1}^n X_i^c.$$

$$2. \left(\bigcap_{i=1}^n X_i \right)^c = \bigcup_{i=1}^n X_i^c.$$

定義 24. \mathcal{S} を集合族 (すなわち、集合を要素とする集合) とする。

1. (和集合)

$$\bigcup_{X \in \mathcal{S}} X := \{x \mid \text{ある } X \in \mathcal{S} \text{ に対し, } x \in X\}.$$

2. (積集合, 共通集合)

$$\bigcap_{X \in \mathcal{S}} X := \{x \mid \text{すべての } X \in \mathcal{S} \text{ に対し, } x \in X\}.$$

(集合族 \mathcal{S} の要素を集合 X_1, \dots, X_n とすれば $\mathcal{S} = \{X_1, \dots, X_n\}$.)

この記法を用いると、前定理は以下のように記述できる。

定理 25. (拡張されたド・モルガンの法則)

任意の集合 X_1, \dots, X_n に対し、以下が成り立つ。

1. $(\bigcup_{X \in \mathcal{S}} X)^c = \bigcap_{X \in \mathcal{S}} X^c.$

2. $(\bigcap_{X \in \mathcal{S}} X)^c = \bigcup_{X \in \mathcal{S}} X^c.$

定義 26. (n 重対, 順序対)

“もの” x_1, \dots, x_n に対し、 (x_1, \dots, x_n) を x_1, \dots, x_n の

n 重対 (じゅうついでい) という。

特に、 (x_1, x_2) を x_1 と x_2 の 順序対 という。 ($(x_1, x_2) \neq (x_2, x_1)$)

定義 27. (直積)

X_1, \dots, X_n を集合とする。

$$X_1 \times \cdots \times X_n := \{(x_1, \dots, x_n) \mid x_1 \in X_1, \dots, x_n \in X_n\}$$

を X_1, \dots, X_n の 直積, または 直積集合 という。

$X_1 = \cdots = X_n = X$ のとき、 $X^n := X_1 \times \cdots \times X_n$ と表す。

(注意) もし、 $X_i = \phi$ ならば $X_1 \times \cdots \times X_n = \phi$.

なぜなら、どのような n 重対 $(x_1, \dots, x_i, \dots, x_n)$ に対しても、
 $x_i \notin X_i = \phi$ であるから $(x_1, \dots, x_i, \dots, x_n) \notin X_1 \times \cdots \times X_i \times \cdots \times X_n$.

例 28. (直積集合)

1. $X = \{2, 1\}$, $Y = \{3, 2, 4\}$ のとき、 $X \times Y$ を外延的記法で表せ。

2. $\{(x, y) \mid (x, y) \in \mathbf{N}^2, x^2 + y^2 \leq 8\}$ を外延的記法で表せ。

3. $\{(x, y, z) \mid (x, y, z) \in \mathbf{N}^3, x + y + z = 4\}$ を外延的記法で表せ。

4. 任意の X, Y, Z に対し、以下が成り立つことを示せ。

$$(X \cap Z) \times Y = (X \times Y) \cap (Z \times Y).$$

5. X, Y, Z, W を集合とする。以下が成り立つことを証明せよ。

$$(X \cap Y) \times (Z \cap W) = (X \times Z) \cap (Y \times W)$$

1. $X = \{2, 1\}, Y = \{3, 2, 4\}$ のとき、 $X \times Y$ を外延的記法で表せ。

(解答) $X \times Y = \{(1, 2), (1, 3), (1, 4), (2, 2), (2, 3), (2, 4)\}$.

2. $\{(x, y) \mid (x, y) \in \mathbf{N}^2, x^2 + y^2 \leq 8\}$ を外延的記法で表せ。

(解答) $\{(1, 1), (1, 2), (2, 1), (2, 2)\}$.

3. $\{(x, y, z) \mid (x, y, z) \in \mathbf{N}^3, x + y + z = 4\}$ を外延的記法で表せ。

(解答) $\{(1, 1, 2), (1, 2, 1), (2, 1, 1)\}$.

4. $(X \cap Z) \times Y = (X \times Y) \cap (Z \times Y)$

(解答)

\subseteq) 任意の $(a, b) \in (X \cap Z) \times Y$ に対し,
 $a \in X$ かつ $a \in Z$ かつ $b \in Y$ である.

したがって, $(a, b) \in X \times Y$ かつ $(a, b) \in Z \times Y$.

ゆえに, $(a, b) \in (X \times Y) \cap (Z \times Y)$.

\supseteq) 上記の逆を示せばよい.

任意の $(a, b) \in (X \times Y) \cap (Z \times Y)$ に対し,

$(a, b) \in X \times Y$ かつ $(a, b) \in Z \times Y$.

すなわち, $a \in X$ かつ $a \in Z$. さらに, $b \in Y$.

ゆえに, $(a, b) \in (X \cap Z) \times Y$.

以上より, 左辺 = 右辺. ■

5. $(X \cap Y) \times (Z \cap W) = (X \times Z) \cap (Y \times W)$

(解答) \subseteq) 任意の $(a, b) \in (X \cap Y) \times (Z \cap W)$ に対し,

$a \in X \cap Y$ かつ $b \in Z \cap W$.

したがって, “ $a \in X$ かつ $a \in Y$ ” かつ “ $b \in Z$ かつ $b \in W$.”

順序を換え, “ $a \in X$ かつ $b \in Z$ ” かつ “ $a \in Y$ かつ $b \in W$.”

ゆえに, $(a, b) \in X \times Z$ かつ $(a, b) \in Y \times W$ より,

$(a, b) \in (X \times Z) \cap (Y \times W)$.

\supseteq) 上記の逆を示せばよい. 任意の $(a, b) \in (X \times Z) \cap (Y \times W)$ に対し,

$(a, b) \in X \times Z$ かつ $(a, b) \in Y \times W$.

すなわち, “ $a \in X$ かつ $b \in Z$ ” かつ “ $a \in Y$ かつ $b \in W$.”

順序を換え, “ $a \in X$ かつ $a \in Y$ ” かつ “ $b \in Z$ かつ $b \in W$.”

ゆえに, $a \in X \cap Y$ かつ $b \in Z \cap W$ より,

$(a, b) \in (X \cap Y) \times (Z \cap W)$.

以上より, 左辺 = 右辺. ■

(例)

X, Y, Z, W を集合とする。

以下の等式が正しいければ証明し、そうでなければ反例を挙げよ。

1. $(X \cup Y) \times (Z \cup W) = (X \times Z) \cup (Y \times W)$

2. $(X - Y) \times (Z - W) = (X \times Z) - (Y \times W)$

3. $(X \ominus Y) \times (Z \ominus W) = (X \times Z) \ominus (Y \times W)$

4. $(X \cup Y) \times Z = (X \times Z) \cup (Y \times Z)$

5. $(X - Y) \times Z = (X \times Z) - (Y \times Z)$

6. $(X \ominus Y) \times Z = (X \times Z) \ominus (Y \times Z)$

定義 29. (べき集合)

X を集合とする。

X の部分集合の全体からなる集合を X の べき集合 とよび、 2^X と表す:

$$2^X := \{Y \mid Y \subseteq X\}.$$

注意

べき集合 2^X は、 X 自身と 空集合 ϕ を要素として含む。

冪集合, 巾集合, power set

例 30. (べき集合)

1. $X = \{a\}$ とするとき、 2^X を外延的記法で表せ。
2. $X = \{a, b\}$ とするとき、 2^X を外延的記法で表せ。
3. $X = \{a, b, c\}$ とするとき、 2^X を外延的記法で表せ。
4. $X = \{\phi, \{a\}\}$ とするとき、 2^X を外延的記法で表せ。
5. $\{a\} \neq \{\{a\}\}$ であることに注意する。
6. $2^{\{\phi\}}$ を外延的記法で表せ。
(ヒント: $X = \{a\}$ の a を ϕ に置き換えて考える。)
7. $2^{2^{\{\phi\}}}$ を外延的記法で表せ。
8. $X = \{a, b\}$ とするとき、 $2^X \times X$ を外延的記法で表せ。

1. $X = \{a\}$

(解答) $2^X = \{\phi, X\}$.

2. $X = \{a, b\}$

(解答) $2^X = \{\phi, \{a\}, \{b\}, X\}$.

3. $X = \{a, b, c\}$

(解答) $2^X = \{\phi, \{a\}, \{b\}, \{c\}, \{a, b\}, \{b, c\}, \{a, c\}, X\}$.

4. $X = \{\phi, \{a\}\}$

(解答) $2^X = \{\phi, \{\phi\}, \{\{a\}\}, X\}$.

6. $2^{\{\phi\}}$

(解答) $2^{\{\phi\}} = \{\phi, \{\phi\}\}$.

7. $2^{2^{\{\phi\}}}$

(解答) $2^{2^{\{\phi\}}} = \{\phi, \{\phi\}, \{\{\phi\}\}, \{\phi, \{\phi\}\}\}$.

8. $X = \{a, b\}$ とするとき、 $2^X \times X$ を外延的記法で表せ.

(解答) $2^X = \{\phi, \{a\}, \{b\}, X\}$ より,

$$2^X \times X = \{(\phi, a), (\{a\}, a), (\{b\}, a), (X, a), \\ (\phi, b), (\{a\}, b), (\{b\}, b), (X, b)\}.$$

定義 31. (有限集合, 無限集合)

有限個の要素からなる集合を 有限集合 という。それ以外の集合を 無限集合 という。有限集合 X の要素数を $|X|$ と表す。

(注意)

1. 空集合 ϕ は有限集合であり、 $|\phi| = 0$ である。
2. 有限集合 X, Y に対し、 $X \cap Y = \phi$ ならば $|X \cup Y| = |X| + |Y|$ が成り立つ。
3. 一般に、有限集合 X_1, \dots, X_n に対し、 $X_i \cap X_j = \phi$ ($i \neq j$) ならば、 $|X_1 \cup \dots \cup X_n| = \sum_{i=1}^n |X_i|$ が成り立つ。
4. 上記のことから、有限集合の要素数を **数え上げる1つの方法**として、それを **互いに共通部分をもたない**、いくつかの **部分集合に分割**し、それぞれの要素数を数えて足し合わせればよい。

定理 32. (包除原理)

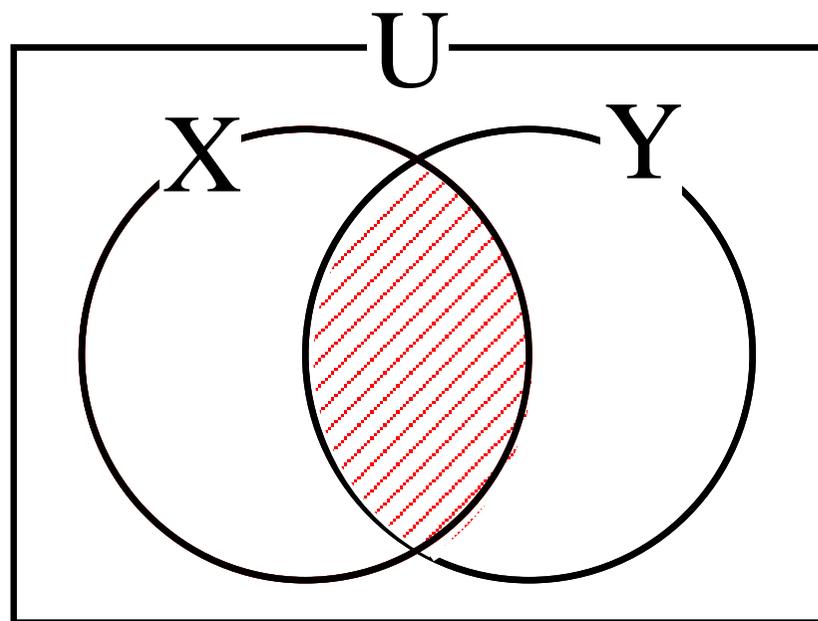
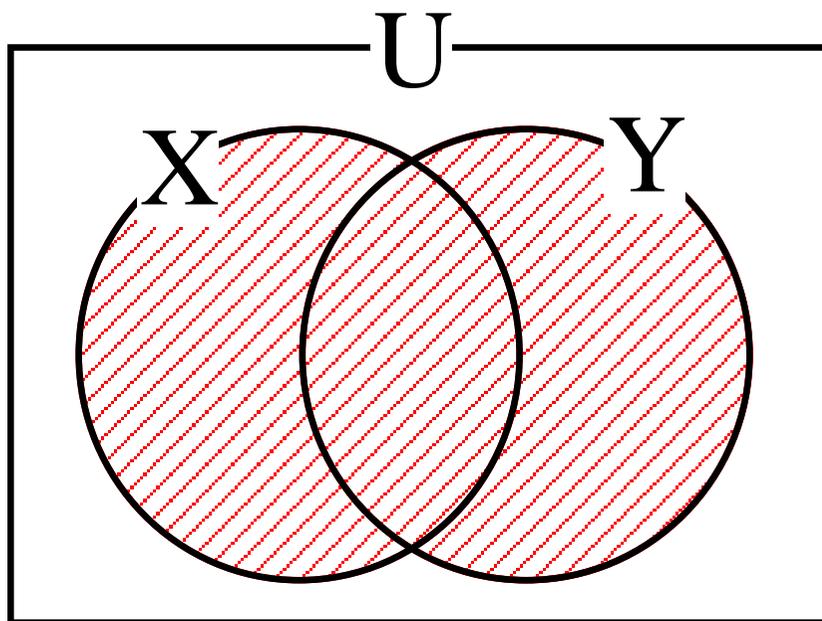
有限集合 X, Y に対し、以下の等式が成り立つ。

1. $|X \cup Y| = |X| + |Y| - |X \cap Y|$. (包除原理)

(Principle of inclusion and exclusion)

2. $|X \times Y| = |X| \times |Y|$.

3. $|2^X| = 2^{|X|}$.



1. $|X \cup Y| = |X| + |Y| - |X \cap Y|$ (包除原理)

(証明) 互いに共通部分をもたないような部分集合で、
集合 X , $X \cup Y$ を次のように表す。

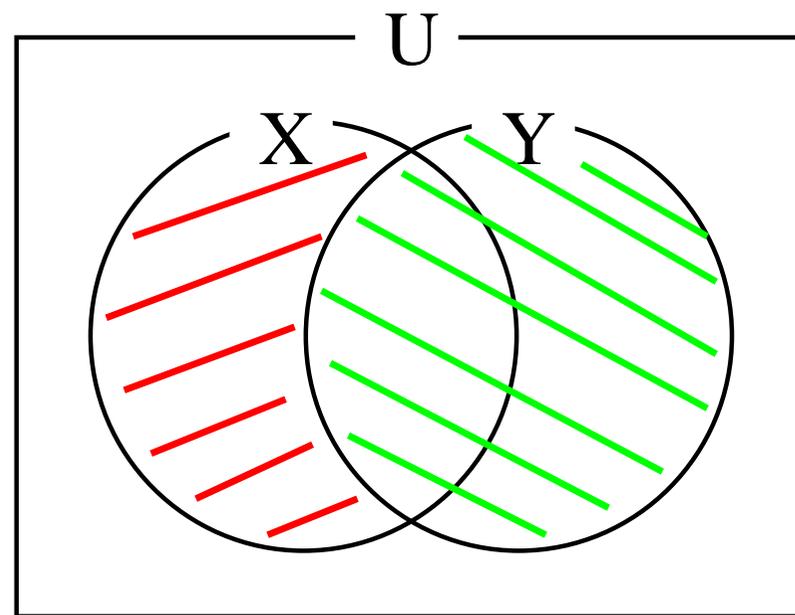
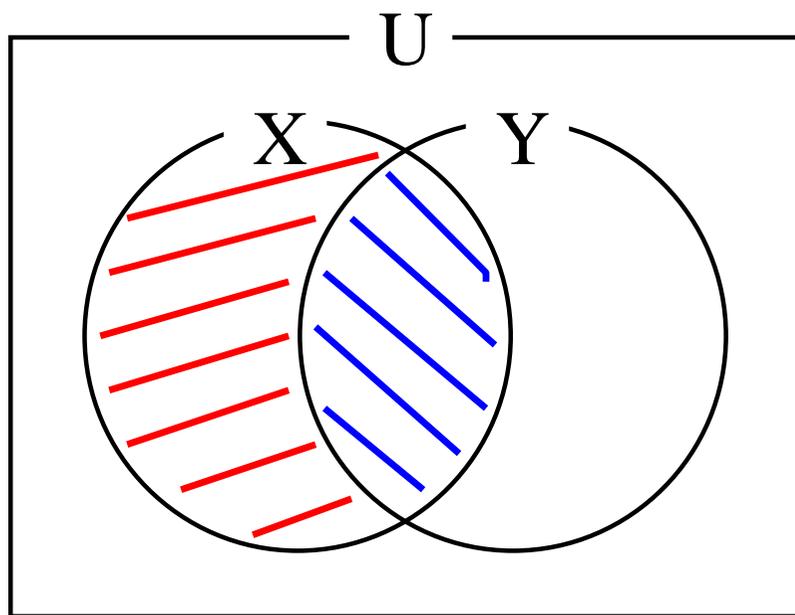
$$X = (X - Y) \cup (X \cap Y), \quad X \cup Y = (X - Y) \cup Y.$$

それぞれより、

$$|X| = |X - Y| + |X \cap Y|, \quad |X \cup Y| = |X - Y| + |Y|.$$

これらより、 $|X - Y|$ の項を消すと、

$$|X \cup Y| = |X| + |Y| - |X \cap Y|. \blacksquare$$



2. $|X \times Y| = |X| \times |Y|$

(証明) $X \times Y$ の要素は、要素 $x \in X$ と $y \in Y$ の順序対 (x, y) である。

x と y がとりうる値の個数はそれぞれ $|X|$ と $|Y|$ である。

したがって、それらから得られる順序対の全体の個数は $|X| \times |Y|$ となる。

ゆえに, $|X \times Y| = |X| \times |Y|$. ■

3. $|2^X| = 2^{|X|}$

(証明) (考え方)

$X = \{x_1, x_2, x_3\}$, $|X| = 3$ について考える .

$\{x_1, x_2, x_3\}$ (b_1, b_2, b_3)	X の部分集合
$(0, 0, 0)$	$\{ \} = \phi$
$(1, 0, 0)$	$\{x_1\}$
$(0, 1, 0)$	$\{x_2\}$
$(0, 0, 1)$	$\{x_3\}$
$(1, 1, 0)$	$\{x_1, x_2\}$
$(1, 0, 1)$	$\{x_1, x_3\}$
$(0, 1, 1)$	$\{x_2, x_3\}$
$(1, 1, 1)$	$\{x_1, x_2, x_3\}$

$\Rightarrow 2 \times 2 \times 2 = 2^3 = 2^{|X|}$

$\left\{ \begin{array}{l} b_i = 1 \text{ ならば要素 } x_i \text{ を部分集合に含める} \\ b_i = 0 \text{ ならば要素 } x_i \text{ を部分集合に含めない} \end{array} \right.$

(証明) 仮定より、 X は有限集合であるから、

$X = \{x_1, \dots, x_n\}$, $|X| = n$ としても、一般性は失われない。

X の部分集合を決める方法として、以下のことを考える。

0と1からなる集合を $B = \{0, 1\}$ とし、その n 重の直積集合を B^n とする。

B^n の要素は、 (b_1, \dots, b_n) という n 重対となる。

そこで、 (b_1, \dots, b_n) を用いて、次のように X の部分集合を定める。

b_i の値が、 $\begin{cases} b_i = 1 & \text{ならば要素 } x_i \text{ を部分集合に含める} \\ b_i = 0 & \text{ならば要素 } x_i \text{ を部分集合に含めない} \end{cases}$

この方法により、 B^n の要素から過不足なく、 X のすべての部分集合を定めることができる。

B^n の要素数は 2^n 個であるから、すべての部分集合の個数も 2^n 個である。

ゆえに、 $|2^X| = 2^n = 2^{|X|}$. ■

(別解) $|2^X| = 2^{|X|}$

n 個の中から k を選び出す組合せの数は $\binom{n}{k} = {}_n C_k = \frac{n!}{(n-k)!k!}$ である。

したがって、 X の部分集合で要素数が k であるものは $\binom{n}{k}$ 個である。

これより、 X の部分集合の総数 $|2^X|$ は $\sum_{k=0}^n \binom{n}{k} = 2^n$ となる。

すなわち、 $|2^X| = 2^n = 2^{|X|}$ 。

ここで、2項定理 $(x+y)^n = \sum_{m=0}^n \binom{n}{m} x^m y^{n-m}$ に

$x = y = 1$ を代入すると、 $\sum_{m=0}^n \binom{n}{m} = 2^n$ が得られる。■

2項定理 $(x + y)^n = \sum_{m=0}^n \binom{n}{m} x^m y^{n-m}$

$$\begin{aligned}(x + y)^3 &= \binom{3}{0} \cdot x^3 + \binom{3}{1} \cdot x^2 y + \binom{3}{2} \cdot x^1 y^2 + \binom{3}{3} \cdot y^3 \\ &= 1 \cdot x^3 + 3 \cdot x^2 y + 3 \cdot x^1 y^2 + 1 \cdot y^3\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}2^3 = (1 + 1)^3 &= \binom{3}{0} \cdot 1 + \binom{3}{1} \cdot 1 + \binom{3}{2} \cdot 1 + \binom{3}{3} \cdot 1 \\ &= 1 + 3 + 3 + 1 \\ &= 8\end{aligned}$$

例 33. n 個の中から k を選び出す組合せの数 $\binom{n}{k}$ が $\frac{n!}{(n-k)!k!}$ と表されることは、良く知られている。その式には、割算が含まれていることが分かる。では、その式の値が常に整数になるのは、なぜだろうか。この問題を解くヒントとなる事柄を以下に記載する。

1. 「 $k, 0 \leq k \leq n$, に対し、 $\binom{n}{k}$ は整数になる」ことを示せ。

上記を命題 $P(n)$ として、 n に関する数学的帰納法で証明する方法が考えられる。

2. n 個の中から k 個を選んで得られる順列の総数は

$${}_n P_k = n(n-1) \cdots (n-(k-1)) = \frac{n!}{(n-k)!}.$$

3. n 個の中から k 個を選んで得られる組合せの総数は

$$\binom{n}{k} = {}_n C_k = \frac{{}_n P_k}{k!} = \frac{n!}{(n-k)!k!}.$$

4. 「連続する k 個の自然数の積は $k!$ で割り切れる」ことを示せ。

k に関する数学的帰納法で証明する方法が考えられる。

5. 式 $\frac{n!}{(n-k)!k!}$ において、その分子 $n!$ は連続する n 個の自然数の積である。それは、連続する $(n-k)$ 個と k 個の自然数の積に分解できる。したがって、上記のことが正しければ、 $\frac{n!}{(n-k)!k!}$ の値は、常に整数となることが分かる。

例 34. (包除原理)

有限集合 X, Y, Z を有限集合 U の部分集合とするとき、
以下が成り立つことを示せ。

$$1. |X \cup Y \cup Z| = |X| + |Y| + |Z| - |X \cap Y| - |X \cap Z| - |Y \cap Z| + |X \cap Y \cap Z|$$

$$2. |X \cap Y| = |U| - |X^c| - |Y^c| + |X^c \cap Y^c| \\ = |X| + |Y| + |X^c \cap Y^c| - |U|$$

$$3. |X \cap Y \cap Z| = |U| - |X^c| - |Y^c| - |Z^c| \\ + |X^c \cap Y^c| + |X^c \cap Z^c| + |Y^c \cap Z^c| - |X^c \cap Y^c \cap Z^c|$$

$$4. |X^c \cap Y^c \cap Z| = |Z| - |X \cap Z| - |Y \cap Z| + |X \cap Y \cap Z|$$

5. 1 から 250 までの自然数の中で、2 でも 7 でも割り切れず、
かつ 5 で割り切れるものは、いくつあるか。(包除原理を用いて考えよ。)

$$1. \quad \frac{|X \cup Y \cup Z| = |X| + |Y| + |Z|}{-|X \cap Y| - |X \cap Z| - |Y \cap Z| + |X \cap Y \cap Z|}$$

(解答)

$$\begin{aligned} |(X \cup Y) \cup Z| &= |(X \cup Y)| + |Z| - |(X \cup Y) \cap Z| \\ &= |X| + |Y| - |X \cap Y| + |Z| - |(X \cap Z) \cup (Y \cap Z)| \\ &= |X| + |Y| + |Z| - |X \cap Y| \\ &\quad - |X \cap Z| - |Y \cap Z| + |X \cap Y \cap Z|. \end{aligned}$$

ここで、 $(X \cap Z) \cap (Y \cap Z) = X \cap Y \cap (Z \cap Z) = X \cap Y \cap Z$ より、

$$\begin{aligned} |(X \cap Z) \cup (Y \cap Z)| &= |X \cap Z| + |Y \cap Z| - |(X \cap Z) \cap (Y \cap Z)| \\ &= |X \cap Z| + |Y \cap Z| - |X \cap Y \cap Z| \end{aligned}$$

となることを最後の等式に用いた。■

References

- [1] 尾関和彦, (情報技術者のための) 離散系数学入門, 共立出版, 2004.
- [2] 尾関和彦, 太田和夫, 國廣昇, “離散数学第一” 及び “離散数学第一演習問題集” 電気通信大学情報通信工学科講義資料, 2004.
- [3] 松坂和夫, 集合・位相入門, 岩波書店, 2003.
- [4] 松坂和夫, 代数系入門, 岩波書店, 2003.
- [5] S. Lipschutz 著, 成嶋弘監訳, 離散数学 (コンピュータサイエンスの基礎数学), オーム社, 2004(H16).
- [6] 小倉久和, 情報の基礎離散数学 (- 演習を中心とした -), 近代科学社, 2006.
- [7] 町田元, 横森貴, 計算機数学, 森北出版, 1990.